

数量詞と否定文

井島 正博

はじめに

否定文の研究の中では、数量詞との関わりを論ずるのは、最も常套的なアプローチである。しかしながら、従来の研究は論理学的な観点で数量詞と否定との関係を割り切ろうとして、自然言語における数量詞と否定との関係を必ずしも正確にとらえていなかったように思われる。本稿では、可能な限り自然言語の中に見出される数量詞と否定との関係を浮かび上がらせることに力を注ぎたい。

1 数量詞

1・1 数量詞の種類

数量詞に関しては、井島（一九九一・三b）で論じたことがあり、そこでとりあえずの種類を提示した。そこで提示した類型そのものに修正を加える必要は感じないが、名称に若干変更を加えてこ

こでも用いることにしたい。

○相対数量詞… あらかじめ全体量が定まっっていて、そのうちのどれだけの割合かを表わす数量詞。

典型的には全部・すべて・み（ん）な／ほとんど・たいてい・

おおかた・*かなり・*多く／*いくらか・*若干・*少し／

*僅か（*を付けたものは次の絶対数量詞と重なる）

○絶対数量詞… 問主観的あるいは話し手自身の、一般的あるいはその場の状況における基準をもとにして当該対象の多寡をはかる数量詞。

たくさん・いっぱい・多く／いくらか・若干・少し／僅か

○計量数量詞… 数量の単位をもとにして、基準よりどれくらいか
偏差があるかによって表わす数量詞。

三人・一〇〇本・五〇〇グラム・二五〇メートル・八時間など

このうち、計量数量詞に関して、否定（および肯定）との関係は、井島（一九九五・一〇）ですでに検討を加えた。そこで本稿では、相対数量詞・絶対数量詞と否定との関わりに関して検討を加え

ることしたい。

1・2 数量詞の特徴

本稿は数量詞そのものを究明するものではないが、数量詞と否定との関係を論じるに先立ち、数量詞相互にもいわゆるスコープの原理が働くことを再確認しておきたい。

(1) a 男の子全員は何人かの女の子を愛している。

b 何人かの女の子は男の子全員に愛されている。

(1) a は男の子は必ず一人以上の女の子を愛していなければならぬが、すべての男の子に愛されている女の子は必ずしもいなくてもよいし、また誰にも愛されていない女の子がいてもよい。(1) b は必ず一人以上の女の子が男の子全員に愛されていなければならないが、誰にも愛されていない女の子はいてもよい(図表一)。

これを論理記号を用いて書くと以下ようになる。

(2) a $\forall x \exists y (x \text{ love } y)$

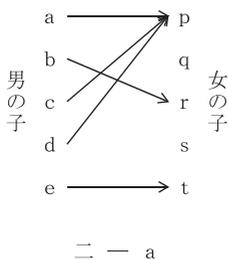
b $\exists y \forall x (x \text{ love } y)$

場合によっては以上のような相違はあまりはつきりと了解されにくいかもしれないが、一方が唯一である場合にはその相違は如実に現われる。

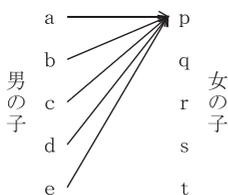
(3) a 男の子全員は(おのおの)一人の女の子を愛している。

b (ある)一人の女の子は男の子全員に愛されている。

すなわち、(3) a の場合、愛されている女の子とは特定の女の子でなくともよいが、(3) b の場合は特定の女の子が男の子全員に愛されていることになる(図表二)。

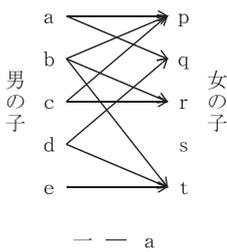


二 — a

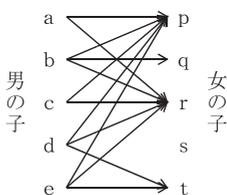


二 — b

図表二



一 — a



一 — b

図表一

2 相対数量詞と否定文

2・1 全称数量詞と存在数量詞

ここでは、相対数量詞の中でも、論理学との関わりにおいて従来特に注目されてきた、全称数量詞(∀)と存在数量詞(∃)に関して検討を加えたい。とはいうものの、論理学と日常言語とは、必ずしもびつたりと対応するわけではない。全称数量詞に対しては、日常言語の「すべて・全部・みんな・全」といった副詞(ないし名詞)が対応すると考えて大過ないが、存在数量詞に対しては、ここではとりあえず「いくつか」という副詞(ないし名詞)を宛てているものの、次善の対応に過ぎない。むしろ「 \sim がある」という表現の方が実情に近く、日常言語の副詞(ないし名詞)には対応物はないと言わねばならぬ。

さて、このようにまず数量詞に関して、全称数量詞に「すべて」存在数量詞に「いくつか」を宛て、関数の直前の否定の有無に対して、動詞の直後の「ない」の有無を宛て、数量詞の直前の否定の有無に対して、「 \sim わけだ」を介した「 \sim わけではない」の有無を宛てると、以下のような八つの文を得ることができる。

- (4) a' すべての矢が的に当たった。(∀x f(x))
 a' いくつかの矢が的に当たらなかつたわけではない。
 (∃x ∼ f(x))

b' すべての矢が的に当たらなかつたわけではない。
 (∀x ∼ f(x))

b' いくつかの矢が的に当たった。(∃x f(x))

c' すべての矢が的に当たらなかつた。(∀x ∼ f(x))

c' いくつかの矢が的に当たらなかつた。(∃x ∼ f(x))

d' すべての矢が的に当たらなかつた。(∀x ∼ f(x))

d' いくつかの矢が的に当たったわけではない。(∃x ∼ f(x))

これらを見渡してまず気付くことは、隣り合った二つずつの文の意味、(4) a' a' がほぼ同義(∀x f(x)) ≡ (∃x ∼ f(x))、(4) b' b' がほぼ同義(∃x ∼ f(x)) ≡ (∀x f(x))、(4) c' c' がほぼ同義(∃x f(x)) ≡ (∀x ∼ f(x))、(4) d' d' がほぼ同義(∀x ∼ f(x)) ≡ (∃x f(x))であることである。

さらに、論理的には次の i ∼ iv の関係が成り立つ。

i ① (4) a' a' a' (∀x f(x)) ≡ (∃x ∼ f(x)) と (4) c' c' c' (∃x f(x))

iii ③ ∃x ∼ f(x) とは矛盾(contradict)する。すなわち、前者が真であれば常に後者は偽となり、前者が偽であれば常に後者は真となる。要するに前者と後者の真偽は常に逆転している。

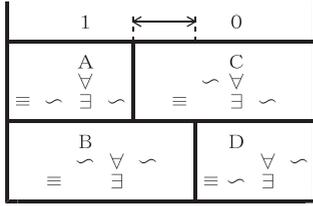
ii ② (4) b' b' b' (∃x ∼ f(x)) ≡ (4) d' d' d' (∀x ∼ f(x))

iii ④ ∃x f(x) とは矛盾する。

ii ① (4) a' a' a' a' (∀x f(x)) ≡ (∃x ∼ f(x)) は、(4) b' b' b' (∃x ∼ f(x))

iii ③ ∃x f(x) を含立(entail)する。すなわち、それぞれ前者が真であれば後者は常に真であるが、逆は成り立たない。

論理的四角形は、まず、四種の論理的なあり方をそれぞれ独立して立てて、それら相互にどのような関係があるかを、矛盾、含立、反対、さらに会話的推意という論理的な関係によって結び付けたものであった。しかしながら、そもそもこれら四種のあり方は独立して存在するものではありえない。ここで論じている数量表現は全体数量に対する割合を表わすものに限られているが、それは全部(1)から皆無(0)までの数直線上に位置付けることができる。そこで、以上の構造を、数直線上に書き直してみると、全部の極にAが、そして全部を除いた数直線にCが位置し、逆に皆無の極にDが、そして皆無を除いた数直線にBが位置するという配置をとるようになる。これをアリストテレスの四角形と比べてみると、四つの領域は互いにねじれの位置をとることがわかる(図表四)。



図表四

この図の上で見ると、数直線上では先程の論理関係は次のように表わされる。

- i ① 領域Aは極限值1、それを除いた数直線が領域Cである(矛盾)。
- ② 領域Dは極限值0、それを除いた数直線が領域Bである(矛盾)。

ii ① 領域Aは領域Bに包含される(含立)。

(\forall は \exists を包含するが、数直線上ではBがAを含む)

② 領域Cは領域Dを包含する(含立)。

(\sim は \sim を包含するが、数直線上ではCがDを含む)

iii 領域Aは領域Dと共通領域を持たず、どちらにも属さない領域がある(反対)。

iv 領域Bと領域Cとは、重なる部分があるものの、一方が他方に包含される関係ではない(会話的推意)。

このように置き換えてみると、四種の論理的なあり方の相互関係は、直観的にもかなり見えやすいものとなってくる。

ところで、以上のような、数量詞と否定との関わりを、本稿で提起しようとする期待と対象のモデルで記述するところなるだろうか。

まず第一に、同一の事態を見る見方として、肯定的な側面から見るか(「的に当たった矢がどれくらいあるか」)、否定的な側面から見るか(「的に当たらなかった矢がどれくらいあるか」という、二つの見方ができる。たとえば、肯定的な側面から、すべての矢が当たっ

たのなら、否定的な側面からは、当たらなかった矢はないことになる。逆に、肯定的な側面から、すべての矢が当たらなかったのなら、肯定的な側面からは、当たった矢はないことになる。このようにこの二つの見方は連動し合っている。ここで、このような特徴を持つのは、いわゆる相対数量詞には限らない。計量数量詞を用いても、相対的数量を表わすことができる(⑤ b'・b', ⑤ c'・c')。また、絶対数量詞を全体量が決まった環境で用いると、臨時的に相対数量を表わすのに用いられる(⑤ d'・d')。

- (5) a すべての矢が的に当たった。
 a' 的に当たらなかった矢はなかった。
 b 三分の一の矢が的に当たった。
 b' 三分の二の矢が的に当たらなかった。
 c (一〇本のうち) 三本の矢が的に当たった。
 c' (一〇本のうち) 七本の矢が的に当たらなかった。
 d (一〇本のうち) 多くの矢が的に当たった。
 d' (一〇本のうち) 少しの矢が的に当たらなかった。

このように同一の事態を見る見方として二つのあり方があることが、同一の意味を表わす表現が二つずつ組になっている理由であると考えられる。ちなみに、これは論理式では、 $\neg(\exists x) \sim (\exists y)$ というように、関数の直前における否定辞の有無に対応している。

ここには、若干特殊な形ではあるが、事態間対比の構造が組み込まれていると考えられる。すなわち、実際には同一事態の描写なの

ではあるが、それを肯定的側面から描写するか、否定的側面から描写するかという対立がここに見られるのである(図表五)。

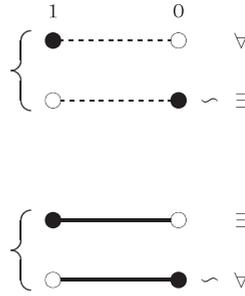
事態間対比



図表五

第二に、同一の事態を表現するために、肯定的・否定的両側面からの二つの見方があるのであれば、それに組み合わせられる数量表現は肯定的な方向から見た場合と、否定的な方向から見た場合とが対称的になっている必要がある。これを1(全称)と0(皆無)とのスケール上で見ると、その左右が反転したものが組になることになり、すなわち、全称(∀)と存在の否定(すなわち皆無、 $\sim \exists$)と、

また存在(三)と全称の否定(∧)とがそれぞれ組になることなる(図表六)。



図表六

ちなみに、存在数量詞の否定は、そもそもそのような事態が存在するかどうかを問題にし、そのような事態があるという期待を、現実にはないと打ち消すものであり、対期待対比に相当する。また、全称数量詞の否定は、事態の存在を事実として認めた上で(前提)、それに関与するのが対象のすべてであるという期待を、現実にはそうではないと打ち消すものであり、要素独立対比に相当する(図表七)。

対期待対比



七 - a

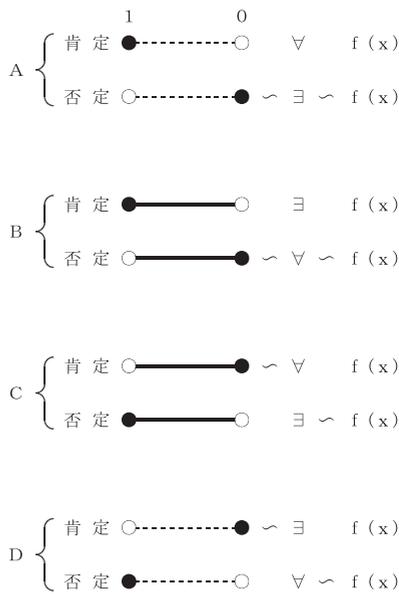
要素独立対比



七 - b

図表七

さて、これに先ほどの肯定的・否定的の二つの見方を組み合わせれば、四種類、八通りの意味の表現が成り立つことになる。要するに、ここに先に見たA∪Dのグループが見出されることになる。具体的には、全称(∀)と存在の否定(すなわち皆無、∅)とおよび存在(三)と全称の否定(∧)とが、関数(≠)と関数の否定(=)とにそれぞれすべての組み合わせをすることになる(図表八)。



図表八

先ほどの二つの観点を組み合わせ、この八通りの日本語の表現に即して、それぞれの意味を日本語の表現手段を通してどのように表わしているのかを確認していきたい。

まずA群は以下のような論理的な意味および日本語の表現にあたる。

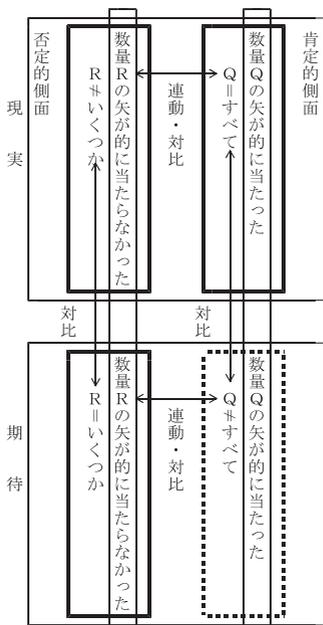
A $\sim \exists \sim f(x) \sim \forall \sim f(x)$

(6) a すべての矢が的に当たった。(A) $\sim \exists \sim f(x)$

a' いくつかの矢が的に当たらなかったわけではない。(B) $\sim \forall \sim f(x)$

この二つの例文は、(6) a が肯定的な側面を表わし、「数量Qの矢が

的に当たった」ことを前提として、その数量が「すべて」であることを表わす要素独立対比の表現であるのに対して、(6) a' は否定的な側面を表わし、「的に当たらなかった矢がある」かどうかを問題にする対期待対比の構造をもとに、そのような矢はない、と述べることで、結果的に「すべての矢が的に当たった」と同義であるものである(図表九)。



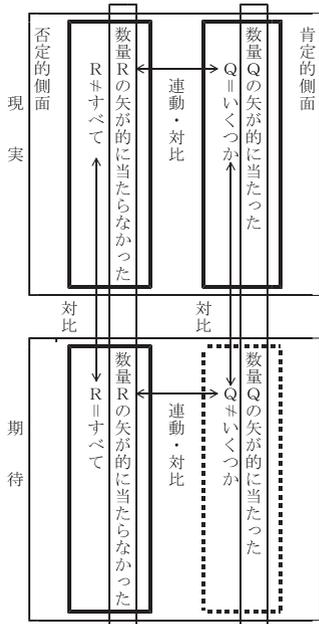
図表九

次にB群は以下のような論理的意味および日本語の表現にあたる。

B $\sim \forall \sim \sim f(x) \sim \exists \sim f(x)$

(7) b すべての矢が的に当たらなかったわけではない。(B) $\sim \forall \sim \sim f(x)$

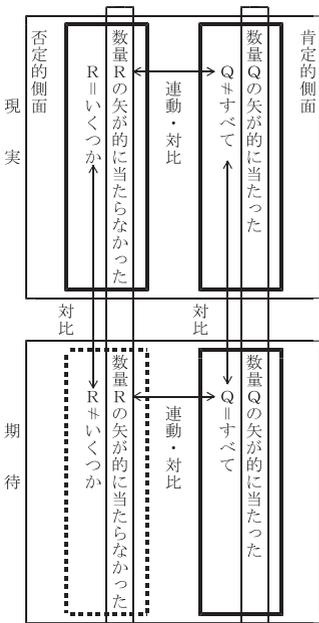
b' いくつかの矢が的に当たった。(□ × f(x))
 これらの例文は、(7)'b'は肯定的な側面を表わし、「的に当たった矢がある」かどうかを問題にする対期待対比の構造をもとに、そのような矢があることを表わす表現であるのに対して、(7)bは否定的な側面を表わし、「数量Rの矢が的に当たらなかった」ことを前提とし、それが「すべて」であるという期待を打ち消す要素独立対比の構造を持つ表現であり、すべて外れたわけではないと述べることで、結果的に「いくつかの矢が的に当たった」と同義となる(図表十)。



図表十

さらにC群は以下のような論理的意味および日本語の表現にあたる。
 $\sim \vee x f(x) \equiv \square x \sim f(x)$

(8) c' すべての矢が的に当たったわけではない。(∼ ∨ x f(x))
 c' いくつかの矢が的に当たらなかった。(□ × ∼ f(x))
 c'' すべての矢は的に当たらなかった。(∼ < x f(x) ≡ (8) c)
 これらの例文は、(8)cは肯定的な側面を表わし、「数量Qの矢が的に当たった」ことを前提とし、それが「すべて」であるという期待を打ち消す要素独立対比の構造であるのに対して、(8)c'は否定的な側面を表わし、「的に当たらなかった矢がある」かどうかを問題とする対期待対比の構造をもとに、的に当たらなかった矢があると述べている。ちなみに、対比のハを用いた(8)c''は、ワケデハナイを用いた(8)c'と同じことを表わしているが、これは「すべて」かどうかについて、期待と現実とが対比関係にあることを意味している(図表十一)。



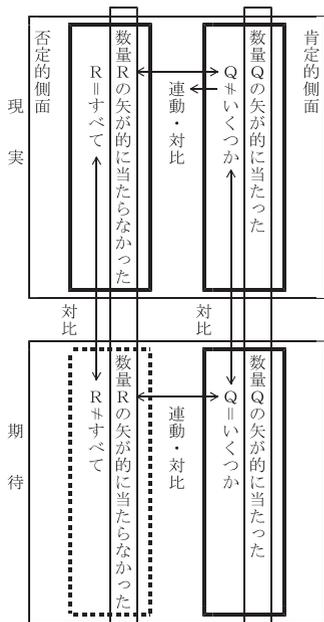
図表十一

最後にD群は以下のような論理的意味および日本語の表現にあたる。

$\forall x \sim f(x) \sim \exists x f(x)$

(9) d' すべての矢が的に当たらなかった。(A $\times \sim f(x)$)

d' いくつかの矢が的に当たったわけではない。(A $\sim \exists x f(x)$)
 これらの例文は、(9) d'は肯定的な側面を表わし、「的に当たった矢がある」かどうかを問題にする対期待対比の構造をもとに、そのような矢があるという期待を打ち消して、そのような矢はないことを表わす表現であるのに対して、(9) dは否定的な側面を表わし、「数量Rの矢が的に当たらなかった」ことを前提とする要素独立対比の構造をもとに、それが「すべて」であることを表わす表現であり、結局「一本も当たらなかった」という意味になる(図表十二)。



図表 十二

以上、論理的観点から論じられる数量詞と否定との関係は、決して不可思議なものではなく、極めて自明なものであることを確認し、その上で、それが期待と対照モデルで記述できることを示した。しかし、他方ではこの立場での数量詞と否定との関係は、自然言語におけるそれとは実はかなり乖離していることも痛感させられる。

2・2 全称数量詞と非全称数量詞

以上見てきたように、アリストテレスの四角形に典型的に示される数量詞と否定に関わる論理的意味が、どのように日本語によって表現されるかを確認してきた。ただ、とりあえずは論理(学)的意味が日本語によって表現できるとしても、ここまで見てきたような表現のうちには、まず用例を探すことのできない用法も少なからず含まれている。

それは第一には、その否定のあり方がホーン(一九七二・八九)のいわゆるメタ言語的否定にあたるもの(ワケデハナイによる否定の多く)であるものが少なくないためでもあるが、第二には、最初に注記したように、全称数量詞「すべて」は日常言語にも対応物が見られるが、存在数量詞はとりあえず「いくつか」という形を宛てるには宛てたが、実際には当該事態に関わる対象が存在することを表わすような数量詞は、自然言語には見出しがたい。

そこで以下では、自然言語の数量詞に焦点を当てた相対数量詞の

分析に歩を進めたい。

ここで全称数量詞との対概念を、存在数量詞ではなく「非全称数量詞」と呼ぶことにしたい。これらの数量は適当と思われる数量(「適当数量」と呼ぶことにする)からの偏差を表わすものと考えられ、適当数量を超えるものを「大量性非全称数量詞」、適当数量に満たないものを「少量性非全称数量詞」と呼ぶことにしたい。これらの数量詞カテゴリーには、実際には以下のような数量詞が含まれる。

- ・大量性非全称数量詞……ほとんど・かなり・たくさん・多く
- ・少量性非全称数量詞……少し・若干・わずか

以上に挙げたものの多くは、絶対数量詞と重複しており、純粹な相対数量詞は決して多くはない。

さて、相対数量詞および絶対数量詞に関しては、加賀(一九九七・七)に興味深い議論が展開されているので、以下しばらく加賀(一九九七・七)の議論をたどり、その後で批判的に検討を加えたい。最初は相対数量詞と絶対数量詞とを区別せずに議論を始める。

まず、肯定文について、数量詞にハを付加する場合と付加しない場合とを考えると、「全部」と「たくさん」は、ハを付加すると不自然となる。

- (10) a 彼はビートルズの曲を全部演奏した。
- b ?彼はビートルズの曲を全部は演奏した。
- c 彼はビートルズの曲を大部分演奏した。
- d 彼はビートルズの曲を大部分は演奏した。

- e 彼はビートルズの曲をたくさん演奏した。
 - f ?彼はビートルズの曲をたくさんは演奏した。
 - g 彼はビートルズの曲をいくつか演奏した。
 - h 彼はビートルズの曲をいくつかは演奏した。
- 他方、否定文については、数量詞にハを付加する場合も付加しない場合もいずれも自然な文となるが、(11) b・fのように、「全部・たくさん」にハが付加したものは「たくさん」の場合やや拡張した意味での)部分否定となる。

- (11) a 彼はビートルズの曲を全部演奏しなかった。
 - b 彼はビートルズの曲を全部は演奏しなかった。
 - c 彼はビートルズの曲を大部分演奏しなかった。
 - d 彼はビートルズの曲を大部分は演奏しなかった。
 - e 彼はビートルズの曲をたくさん演奏しなかった。
 - f 彼はビートルズの曲をたくさんは演奏しなかった。
 - g 彼はビートルズの曲をいくつか演奏しなかった。
 - h 彼はビートルズの曲をいくつかは演奏しなかった。
- 同様の現象は、音調の問題を勘案すれば英語にも共通に見られるという。すなわち、以下の肯定文の(12) a ~ d を下降型音調で読むと、いずれも自然となるが、対比を含意する下降・上昇型音調で読むと、(12) a のみ不自然となりそれ以外は自然となるという。
- (12) a I sang ALL of the songs.
 - b I sang MOST of the songs.

- c I sang MANY of the songs.
 d I sang SOME of the songs.

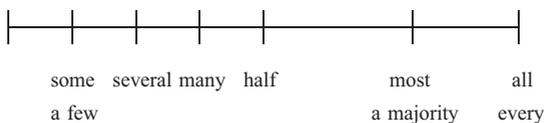
それに対して否定文の場合、(13) a を下降・上昇型音調で読む場合、あるいは(13) c のように many に卓越の強勢が置かれず、部分否定の解釈が得られるが、many に卓越の強勢が置かれる(13) c の場合には否定の作用域外の解釈が優勢となる。また most, some が用いられる(13) b・d の場合には、下降型音調、下降・上昇型音調いずれの場合でも否定の作用域外に解釈されるといふ。

- (13) a I didn't sing ALL of the songs.
 b I didn't sing MOST of the songs.
 c I didn't sing MANY of the songs.
 d I didn't sing SOME of the songs.
 e I didn't sing many of the SONGS.

このように、数量詞と否定とに関する言語普遍的な特性が背後に存在するものと推測される。加賀(一九九七・七)の最も主要な論点は、この問題を整合的に解決することにあると言ってもよいだろう。

ちなみに、数量詞に関しては、従来ホーン(一九七二、八九)のような一元的なスケール上で議論されてきた。すなわち、以下のようなスケールである。見てわかるように、ここでは、**相対数量詞・絶対数量詞**の区別なく、同一のスケール上に個々の数量詞が位置付けられている。さらに言えば、このスケールは全体量の中での割合

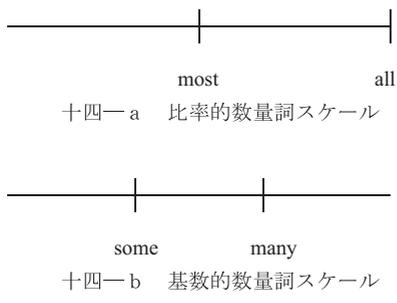
を表わすものなのか、直感的にとらえられる数量の多寡を表わすものなのかも不明確である(図表十三)。



図表十三

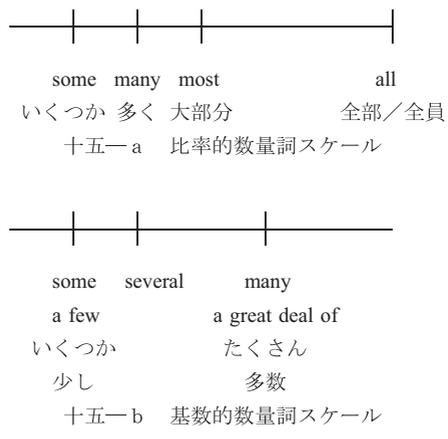
しかるに、ここには many の位置付けなどに関して、このようなスケールには収まりきらない構文的事実も見出されることから、むしろ二つの異なるスケールが重なっていると考える方が妥当であ

ると結論付けられる。その二つは「比率的数量詞 (proportional quantifier) スケール」と「基数的数量詞 (cardinal quantifier) スケール」と名付けられる。言うまでもなく、前者は本稿の相対数量詞、後者は本稿の絶対数量詞のことである。ここで最も基本的な二つのスケール上での対立概念は、比率的数量詞スケールの場合は、二 (全部) / most (大部分) であり、基数的数量詞スケールの場合は、many (たくさん) / some (いくつか) であるという (図表十四)。



図表 十四

ここに周辺の数量詞を補えば以下のようになる。ここで、some (いくつか) などは両スケールにともに用いられるなど、両面を持つ数量詞も存在することも認めることになる (図表十五)。



図表 十五

この段階で、さきほどの「全部／大部分」と「たくさん／いくつか」との構文的な振舞いの共通性を振り返ってみると、前者は比率的数量詞スケール上での対立、後者は基数的数量詞スケール上での対立という相違はあるものの、「数量詞スケール上で上位項であるか、あ

るいは、下位項であるかの対立」であるという点においては共通していることが了解される。

このように、加賀(一九九七・七)は、相対数量詞と絶対数量詞とを区別することを主張し、さらにそれぞれに上位・下位の二つの典型的要素が見出され、構文的に平行する振舞いを見せる、という非常に刺激的な論を展開している。しかるに、筆者は実際には相対数量詞と絶対数量詞とは決して並行的な振舞いをするわけではないと考える。そこで、ここではまず相対数量詞の方から検討を加えていきたい。先ほどの全称数量詞と非全称数量詞との構文的振舞いの違いを確認しておきたい(例文を若干入れ替えて再掲)。

全称数量詞は、肯定文では、ハを伴わない場合はそのままいわば全部肯定を表わし(14a)、ハが伴うと不自然となる(14b)のに対し、否定文では、ハを伴わない場合は全部否定を表わし(14c)、ハを伴う場合は部分否定を表わす(14d)。一方非全称数量詞は、肯定文では、ハの有無に関わらず非全称数量(「大部分」)の肯定を表わす(15a・b)のに対し、否定文では、ハの有無に関わらず非全称数量(「大部分」)の否定を表わす(15c・d)。このように、全称数量詞と非全称数量詞とは、構文的な振舞いが大きく異なる。

- (14) a 彼はビートルズの曲を全部演奏した。
 b ??彼はビートルズの曲を全部は演奏した。
 c 彼はビートルズの曲を全部演奏しなかった。
 d 彼はビートルズの曲を全部は演奏しなかった。

- (15) a 彼はビートルズの曲を大部分演奏した。

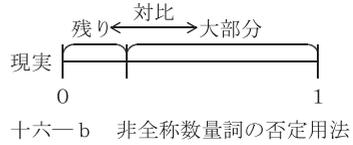
b 彼はビートルズの曲を大部分は演奏した。

c 彼はビートルズの曲を大部分演奏しなかった。

d 彼はビートルズの曲を大部分は演奏しなかった。

以上の構文的な事実は、どのように解釈できるだろうか。全称数量詞と非全称数量詞との最も本質的な相違は、非全称数量詞は常にそれに含まれない、残り〴〵のものを念頭に置いて用いられるのに対して、全称数量詞は、残り〴〵のものがそもそも存在しないという点にあるように思われる。

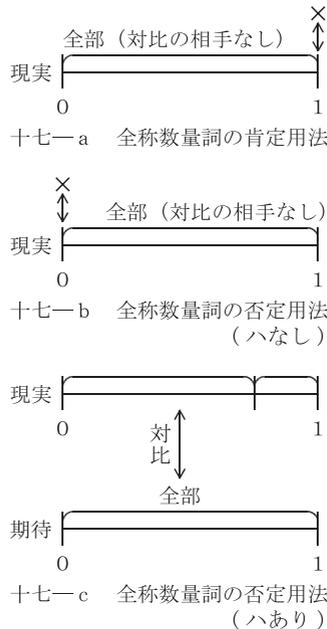
すなわち非全称数量詞は、肯定文にしる否定文にしる、ハの有無に関わらずおよそ大きな意味の違いなく用いることができるが、それはもともと非全称数量詞が、残り〴〵のものと対比関係にあるからであり、ハが加わるとその対比関係が明示化されると考えられる。たとえば、(15a)とdに関して言えば、「彼はビートルズの曲を大部分(は)演奏した」のであれば、「一部の曲は演奏しなかった」ということを含意し、「彼はビートルズの曲を大部分(は)演奏しなかった」のであれば、「一部の曲は演奏した」ということを含意することになる。そしてさらにハが加わると、「 \sim が、最も人口に膾炙した」Let It Beは演奏しなかった(15b)、「 \sim が、最も人口に膾炙した」Let It Beは演奏した(15d)のような内容が続くか省略されていると了解され、むしろその部分に重点が置かれる(図表十二)。



図表十六

それに対して、残りのものが原理的にありえない全称数量詞の振舞いはどう説明できるだろうか。肯定文に関してはあまり問題が生じない。すなわち、ハがなければいわゆる全部肯定を表わすことができる(14 a)が、残りがないために対比のハはここに用いることはできない(14 b)。若干複雑なのは否定文である。とは言っても、ハがない場合は単に全部否定を表わす(14 c)に過ぎないが、ハがある場合は不自然となるわけではなく、部分否定を表わすことになるが、ここにさらなる説明が必要となる。これまで、数量詞として、残りのものがある場合には、当該のものと残りのものとの間に対比関係が成立すると考えてきたが、そもそも筆者はこれまで否定文そのものが対比関係によって成立する表現であると論じてきた。その代表的なものが、話し手の前もって抱いていた「期待」

との対比である。この場合も、あえて全称数量詞に対比のハを添えることによって、話し手が前もって持っていた期待に対して、現実にはそうではなかった、ということを表示しているものと思われる。すなわちこれが部分否定の実態であると考えられる(14 d) (図表十七)。



図表十七

2・3 相対数量詞の実例による検証

以上の理論的な検討を、実例の現われ方を見ることによって検証していききたい。なおここでは、否定文中に現れる数量詞のみを見ていくことにしたい。

まず全称数量詞に関して、「すべて」「および」「全」(「全部」「全

員」などを合わせて見ていきたい。部分否定には、(16) a & d のようにワケデハナイ、ワケニイカナイ、ノデハナイなどを用いるものや、(16) e・f のように(数量詞十)ハを用いるものが多いが、それ以外のものも見られる。

(16) a 暗号が解かれたというと、日本海軍の暗号は、手もなく悉くアメリカに筒抜けであったように一般に解釈され勝ちであるが、——そして、そうでなかったと言いつけることは出来ないけれども、「彼らも必ずしもすべてを読み得ていたわけではない、その証拠は幾つか挙げることが出来る、一番手近な例は、この時から三カ月半後のキスカの無血撤退だ」という説がある。

阿川弘之『山本五十六』1383

b (加藤は山で会っても碌な挨拶をしない、態度が悪い) という評判が山仲間の間に取り沙汰されていた。加藤がひどく無口になったことは確かだったが、別に態度が悪くなくてもいいし、他人との交際をすべて断絶したのもなかった。

新田次郎『孤高の人』1022

c 「征服王」と形容されたマホメッド二世の戦績が、すべて成功で色どられていたわけではない。ペルグラード攻略は失敗し、ロードス島も陥ちなかった。

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』483

d 「シャプリング・システムは極めて有効に働いているし、今ここでそのシステムを全部ゼロに戻すことは現実的に不可能とい

うことでした。そうすると『組織』の機能が麻痺してしまうのです。それに全員が死ぬと決まったわけではないし、もし生き残った人間がいたら、それを有効なサンプルとした次の研究を進めればよからう、と彼らは言いました。そこで私は降りたです」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』968

e 医務課には、刺青をとってくれと言ってくる者がかなりいた。いったん皮下に染みた色は全部はとれないが、ある程度までは除去できた。

立原正秋『冬の旅』880

f 私の面接場は、楽食の片隅にあった。楽食、すなわち楽屋の食堂であろうか。そこに一週間分、六人の踊り手たちが待っていてくれるはずだった。その時會った人々の名前を、私はもう全部は憶えていない。だが、学生時代の同級生の名前よりは、多く憶えているような気がする。一度か、二度、わずかな時間語り合っただけの人の名前を忘れないでいるのは、やはりあの楽食の印象が、かなり強烈だったせいには違いない。

五木寛之『風に吹かれて』109

g 内務省がひそかに裏から手をまわして、小樽で差押えさせたのにちがいない。そうだと断定できないが、水上警察がすべての船をくわしく調べているはずはない。

星新一『人民は弱し官吏は強し』213

h 「おれは考えてみる、このところずっと考えているんだ」と榮二はやがて云った、「もっ、こ部屋のことが役所へ知れていない

筈はないし、全部の役人が買収されるなんてこともないだろう、役所でまだ手を出さないのは、そこになにかわけがあると思うんだ、きつとなにかわけがある、だから、頼むからむちゃなこととはよしてくれ、おれたちの四人や五人で片づくことじゃあねえんだから」

山本周五郎『さぶ』556
また、部分否定の用例に比べれば少ないが、(17) a、e のように全部否定の用例も見出すことができる。

(17) a 銀之助が駈寄つて、「瀬川君——君は気分でも悪いと見えるね」と言つたのは覚えてるが、その他の話はすべて記憶に残らなかった。

島村藤村『破戒』413

b 或いはこれもすべて私の幻想かも知れないが、私はすべて自分の感じたことを疑うことが出来ない。追想も一つの体験であつて、私が生きていないと誰がいえる。私は誰も信じないが、私だけは信じているのである。

大岡昇平『野火』331

c これが、長い間、憧れていた、一人で暮すこと、の実態かと太郎は自嘲的に思った。もちろん、まだうまくはない。うまくないことはわかり切っている。だから、すべてのこと、なめらかに行かない。

曾野綾子『太郎物語』791

d 多くの人に会つたあげく、私に残された結論は「わからない」というものだった。彼らが語ってくれたすべてが原因であり、すべてが原因ではないのだろうと思えた。

沢木耕太郎『一瞬の夏』236

e こうして、徐々に島には、飢餓の色が濃くなっていった。まだ全員が餓死しないですんでいるのは、潜水艦による補給が何回か行われたからである。

北杜夫『楡家の人々』1785

次に非全称数量詞であるが、加賀(一九九七・七)では、最も典型的な非全称数量詞として「大部分」が挙げられており、実際否定文中に用いられた例も(18) a、e のように拾うことができる。しかし「大部分」は用例もそれほど多いわけではなく、必ずしも典型的とは言えないようである。

(18) a けれども彼等民衆の大部分は、ほとんど法律を知らない。知らない法律によって彼等は拘束される。したがって彼等は法律というものに幼稚な敵意をもっているらしい。法律は民衆を保護するものではなくて、民衆に損害を与えるものだと思つていない。

石川達三『青春の蹉跌』17

b 大部分の提督たちは、大艦巨砲主義、戦艦中心の聯合艦隊といった古典的なイメージを、まだまだ頭から捨て去る事が出来なかつた。彼らにとつて、飛行機はどこまでも補助兵器であつた。

阿川弘之『山本五十六』340

c ぼくは黙っていた。未紀はもつと多くのことをしゃべつた。ぼくの頭の回路にははげしい雑音が発生していて彼女のことばの大部分をぼくは理解しなかつた。

倉橋由美子『聖少女』258

d 龍子が、今日は白と紫の矢がすりの着物で到着したのは、十両の土俵入りが済んだ直後で、大鉄傘の下にひろがる棧敷はま

だがらんとしていた。それは、徒らに緋毛氈の色をくりひろげて、大部分（ひととけ）人氣もなく、とりどりの座蒲団をむなしく並べて扱（ひら）っていた。

北杜夫『楡家の人々』790

e 出発の風景からして異常に心細いものであった。大部分内種（うちむね）の西も東もわからぬ補充兵たちは銃も持たされなかった。鉄兜（てつかぶと）もなかった。軍靴（ぐんか）さえもなかった。彼らは地下足袋をはき、肩から竹筒の水筒をさげていた。それが装備のすべてであり、少しも勇ましきところのない敗残兵さながらの光景といえた。

北杜夫『楡家の人々』1662

むしろ日本語で多用されるのは、「ほとんど」であるが、「ほとんど」には(19) a ~ g のような数量詞として用いられるもの、他、(20) a ~ e のように程度副詞として用いられるものも少なくない。

(19) a 私はほとんど呑めなかつたが、柏木と共に、さし出されたグラスを、合掌（あがしやう）してから、手にとった。女二人は水筒の紅茶を飲んだ。三島由紀夫『金閣寺』258

b それを、乗員たちのたつての希望で、艇の航続距離を増す工夫をし、収容のめどを立てた上で出すことになったが、結局五隻とも親潜水艦に帰つて来ず、戦果もほとんど挙げ得なかつた。

阿川弘之『山本五十六』1020

c しかしタイピストを使わないとなると、大使館の主だった職員の中にタイプライターの打てる者はほとんどいない。奥村書記官がその数少ない一人であるが、とても本職のタイピストの

ようにはいかない。

阿川弘之『山本五十六』1044

d 「大和」以下の戦艦群は、再び柱島に根を下ろしてしまつた。短い梅雨が明けて、夏が来た。この年の夏は、異常の猛暑で、七月初め以来、瀬戸内海に、ほとんど雨が降らなかつた。

阿川弘之『山本五十六』1220

e 頂上の雪は意外に少なく静かであつた。ほとんど風はなかつた。頂上三角点の標石も、祠（ほぢ）も、夏のままであつた。

新田次郎『孤高の人』520

f この季節の日曜日にはレンタ・カーはほとんど残つてはいないし、外車なんてそもそも置いてもないのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1257

g 獅子像の下の少年は、通りかかつた人の気に入るような曲をひくのです。それで、われわれを見ると、おぼえた日本の歌などを弾きましたが、われわれにはもうやる錢もほとんどありませんでした。竹山道雄『ビルマの豎琴』137

(20) a 我々はまわりの風景に目をやりながら、ゆつくりと川上に向つて歩いた。そのあいだ僕も彼女もほとんど口をきかなかつたけれど、それは話すことがないからではなく、話す必要がないからだつた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』996

b 「実は僕にも分らなくなつちやつたのさ……」私はそう返事をしながら、彼女の方を見やつたが、その白い顔の輪廓（りんかく）がもうほ

とんど見分けられないくらい暗さになりだしていた。実際私自身にもこんな風に私たちの歩いている山径の見当がちよっと付きかねていたのだけれど、私はわざとそれを冗談のように言い紛らわせていたのだった。

堀辰雄「美しい村」133

c この老人は、いつも何か仕事をしていた。年をとっているのに、じつにまめな人で、ほとんど手をやすめているということがなかった。

山本有三「路傍の石」553

d 高官たちが判事のうしろに控え、被告を傲然と見おろしている形は、公正な感じとはほど遠い。判事を無言のうちに圧迫し、被告にけしかけているようであった。この特別傍聴席は、いつもはほとんど利用されないのだが、今回はとくに椅子をふやしてあった。この裁判についての、新しい高官たちの期待がはつきりとわかる。

星新一「人民は弱し官吏は強し」398

e スコップを手にしたとたんに、折りたたみ式の三脚のように、疲労で骨がずるずると短くなる。そう言えば、昨夜からほとんど一睡もしていないのだ。なにはおいても、最少限しなければならぬ仕事の量を、あらかじめ女と打ち合わせておく必要がありそうだ。

安部公房「砂の女」294

以上のように、非全称数量詞の場合、「大部分」でも「ほとんど」でも、主題のハが下接することはあっても、対比のハが下接することは滅多になく、肯定文では肯定的な事態に関与するものの数量を表わしているのと対照的に、否定文では否定的な事態に関与するものの数

量を表わしている。

3 絶対数量詞と否定文

3・1 絶対数量詞

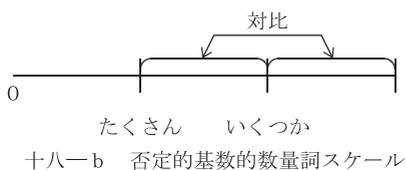
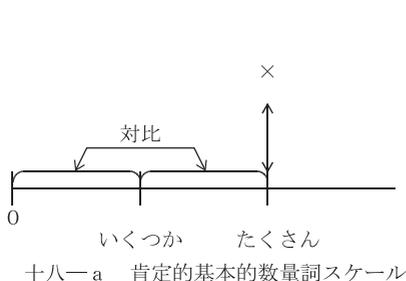
続いて、絶対数量詞に関しても考察を加えたい。ここで、とりあえず絶対数量詞も数量の大小によって二分しておきたい。

- ・ 大量性絶対数量詞……たくさん・多く
- ・ 少量性絶対数量詞……若干・少し・少々・わずか・いくらか・いくつか

加賀（一九九七・七）の議論によれば、大量性絶対数量詞は、肯定文では、ハのない場合は自然でありわば、 大量肯定 とといった意味となる(21a)が、ハが添えられると不自然となる(21b)の対して、否定文では、ハのない場合はいわば、 大量否定 とといった意味になる(21c)が、ハがある場合はむしろ、 少量肯定 とといった意味になる(21d)。他方、少量絶対数量詞は、肯定文では、ハの有無に関わらず、 少量肯定 とといった意味になる(22a・b)の対して、否定文では、ハの有無に関わらず、 少量否定 とといった意味になる(22c・d)。

(21) a 彼はビートルズの曲をたくさん演奏した。

b? 彼はビートルズの曲をたくさんは演奏した。



図表十八

(22) c 彼はビートルズの曲をたくさん演奏しなかった。
 d 彼はビートルズの曲をたくさんは演奏しなかった。
 a 彼はビートルズの曲をいくつか演奏した。
 b 彼はビートルズの曲をいくつかは演奏した。
 c 彼はビートルズの曲をいくつか演奏しなかった。
 d 彼はビートルズの曲をいくつかは演奏しなかった。

確かに以上の例はそのように解釈できるし、そうだとすればこのような振舞いはまさに相対数量詞とまったくと並行的になる。であれば、相対数量詞と絶対数量詞との構文的な振舞いは並行的である、という結論に至りそうに思われる(図表十八)。

しかしはたして、これが典型的な絶対数量詞の振舞いだと了解してよいものだろうか。問題は否定文の環境で見出される。すなわち、大量性絶対数量詞の(21)cと、少量性絶対数量詞の(22)c・dに関して、これらは本当に絶対数量詞としての用法なのだろうか。すなわち「ビートルズの曲」という領域が、「歌謡曲」などのように、現実的に無限でなくても、総体をとらえきれないあるいは理念的に増大可能であればよいのであるが、「ビートルズの曲」は残念ながら、総数が算定可能なものと認識されるのではないだろうか。であるとすれば、全体量のうちの割合を表わす相対数量詞によって計量されるべき対象である。すなわちここに、いかに絶対数量詞としても用いられる表現を宛てたとしても、相対数量詞として解釈されるのではないだろうか。たとえば、(21)cのように「たくさん演奏しなかった」と言えば、「若干は演奏した」という「残り」の対比を含意し、(22)c・dのように「いくつか(は)演奏しなかった」と言えば、「多くのものは演奏した」という「残り」の対比を含意するという意味である。本来の絶対数量詞とは、このような「残り」の対比の含意を持たないものであると考えられる。言い方を変えれば、絶対数量詞は存在するものの数量の多寡をはかるものである、すなわち原則として肯定文中に用いられるものであり、存在しないものの数量の多寡をはかるものではない、すなわち原則として否定文中では用いられないものであると思われる。

具体的には以下のような許容度の分布をなすだろう。すなわち、

まず大量性絶対数量詞も少量性絶対数量詞も、肯定文中でハを伴わずに用いられる(23 a・(24) a)。次に、大量性絶対数量詞は否定文中でハを伴って用いられ(23) d)、少量性絶対数量詞は肯定文中でハを伴って用いられる(24) b)。(ここでは、少量性相対数量詞として、現実には「いくつか・いくらか」が用いられることは多くはなく、むしろ「少し」が用いられることが多いことから、「少し」を例として挙げるが、とりあえずここで問題にしている構文的現象に関しては、「いくつか・いくらか」にも共通にあてはまる)。

(23) a 立食パーティーで料理をたくさん食べた。

b *立食パーティーで料理をたくさん食べた。

c *立食パーティーで料理をたくさん食べなかった。

d 立食パーティーで料理をたくさんは食べなかった。

(24) a 立食パーティーで料理を少し食べた。

b 立食パーティーで料理を少しは食べた。

c *立食パーティーで料理を少し食べなかった。

d *立食パーティーで料理を少しは食べなかった。

(23) a・(24) aに見られる構文的現象は、まさに絶対数量詞が存在するものの数量をはかるものであって、他のものとの対比を原則として含まないことから当然の帰結である。(23) d・(24) bに見られる構文的現象については、大量性絶対数量詞にも少量性絶対数量詞にもハが伴い、大量性絶対数量詞は否定文中で用いられる、というように一見先の議論に抵触しそうに思われるので、さらに考察が必要であ

る。しかるに、実はこの二つの文は、同じ事態を描写したものと解釈することができる。すなわち、(25)のように続けることが可能である。

(25) 立食パーティーで、料理をたくさんは食べなかったが、少しは食べた。

このことは、数量スケール上で、大量性絶対数量詞と少量性絶対数量詞とは対比関係をなしているということの意味する。すなわち、そのために対比のハを伴うことが可能なのであり、大量性絶対数量を否定することが少量性絶対数量であることを表わすことになると考えられる。すなわち、「たくさんは食べなかった」ということが「少しは食べた」を意味し、「少しは食べた」ということが「たくさんは食べなかった」を意味することになる。しかしここには非対称性が見出され、「*少しは食べなかった」が「*たくさんは食べた」を意味すること、あるいはその逆は成立しないのである。すなわち含意には方向性が存在するということである。大量性絶対数量を否定して少量性絶対数量を含意することはあっても、その反対はないということである。

それでは、少量性絶対数量を否定する表現はないのだろうか。実はそのような表現は存在するのであるが、対比のハではなく並列のモが用いられ、(26) cのように、数量ゼロ、すなわち皆無であることの意味する(26) a)。この点に関しては、「いくつか・いくらか」は(26) b)に見られるように、「いくつか/いくらか」も…ない」の形で用いられることはない。このことは、「いくつか・いくらか」が必ず

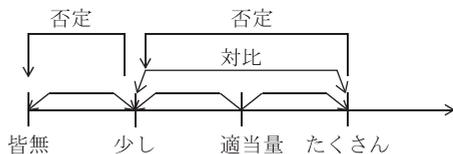
しも少量性相対数量詞として機能しているわけではないことを示唆しているのだろう。

(26) a 立食パーティーで料理を少しも食べなかった。

b *立食パーティーで料理をいくらかも食べなかった。

c 立食パーティーで料理を全然食べなかった。

まずなぜモが用いられるかに関して検討したい。先の大量性絶対数量と少量性絶対数量の場合は「たくさんは食べなかったが、少しは食べた」というように、大量が否定され少量が肯定されるという構造になる。すなわち否定と肯定との組み合わせとなり、対比関係となる。しかるに少量性絶対数量を否定して皆無を表わすわけであるから、否定と否定との組み合わせとなり、ここには並列関係が成立する。これがモが用いられる理由であると思われる。さらに少量性絶対数量が否定されると、大量の方向へは向かわずに、皆無を意味することになるが、ここにも多から少への方向性が見て取れる。すなわち大量を否定すれば少量を意味し、少量を否定すれば皆無を意味するのである。「一十助数詞+モナイ」という表現が皆無を表わすことに関する議論は、井島(一九九五・一〇)において計数数量詞の表現を扱った際に行った(図表十九)。



図表十九

3・2 絶対数量詞の実例による検証

次に以上で検討してきた絶対数量詞の理論的な特徴を、実例をもとに検証していきたい。大量性絶対数量詞については、「たくさん」と「多く」を見ていきたいが、両者とも打ち消されることによつて(その際、ハを伴う場合も伴わない場合もある)、実際には少量であることを表わす点においては共通している。ただし、「たくさん」の場合には、しばしば直前に「そんなに」「そう」「これほど」などが伴う。

このことは、一般的に予想(期待)される数量を念頭に浮かべ、それを話し手(作者)が「たくさん」だと評価し、実際はもっと少ないことを述べるものであると思われる。

(27) a 服の脱ぎ方の魅力的な女の子は数多くいても、服の着方の魅力的な女の子となるとそんなにたくさんはいない。彼女がすべて服を身につけて手の甲で上に持ちあげるようにして長い髪を整えると、部屋の空気が入れかわったような気持ちになった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』367

b さて、大分稽古を積んだからもうそろそろよかろうと云うのは、始めて私たちが銀座のカフェ・エルドラドオへ出かけたのは、その年の冬のことでした。まだその時分、東京にはダンス・ホールがそう沢山なかつたので、帝国ホテルや花月園を除いたら、そのカフェエがその頃漸くやり出したくらいのものであったでしょう。

谷崎潤一郎『痴人の愛』183

c そのなかでも、ランプそうじが一番が手だった。ランプそうじは今までもずいぶんやらされたが、こんなにたくさん、そうじを言いつけられたことはなかつた。ここのは文選場や植字場で使うのを、いちどきに十五も、二十もやらされるのだから、たいてい半日は、ランプそうじでつぶれてしまう。まるでランプそうじを習うために、工場にはいったようなものだった。

山本有三『路傍の石』549

d 「おかげで、どうやら出世しました」熊さんは、そんな挨拶を

した。「あほらしい」内儀さんが傍で言うのと、「出世やないか。今時、ちゃんど一軒の店を持ち、食うに困らん奴はそう沢山はいないぞ、なあ、梶さん」

井上靖『あすなる物語』328

e ポート・モレスビー、ラバウル經由の定期航空便でインマで行き、アクカアクのとりのココボという部落の土民の青年たちに頼めば、場所を知っていて陽気に日本の歌を歌いながら連れて行ってくれる。ただし、往時ほどたくさん蚊はいないし毒蛇や猛獣もないが、あんまり楽な史蹟めぐりというわけにはいかない。

阿川弘之『山本五十六』1353

f 御主人はしばらく考え込むようにしていらつしゃいましたが、やがてこう仰言つたのです。「私は、モーツアルトのことは誰よりも知ってるつもりでした。私以上に、モーツアルトを聴いた人は、そんなにたくさんいてとは思えん。そのくらい、モーツアルトのことに関しては自信を持つてました。…」

宮本輝『錦繡』153

g 脱いだ上着をかかえ、ビルの地下にある食堂街の看板を見ながら歩きはじめた。食堂街を地下にもつていいるビルはそんなに沢山はなく、日比谷通りに出るともう昼食に入れるような店は見あたらなくなつてしまった。椎名誠『新橋鳥森口青春篇』165

それに対して、「多く」の場合は、一般的な予想を背後に持つような用例は、あつてもおかしくはないと思われるが、あまり見出されなかつた。

(28)

a 日が暮れると僕はベッドから起きあがって冷たい水ではれた目を洗い、黒い眼鏡をかけ、雪の積った丘の斜面を下って図書館にかけた。しかし眩しい光に目を痛めた日には、僕にはいつものように多くの夢を読むことができなかった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』791

b 年の若い私は稍ともすると一凶になり易かった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどのつまりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりも只独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。

夏目漱石『こころ』67

c 私は殆んど父の凡でも知り尽していた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあただけであった。先生の多くはまだ私に解っていないかった。話す約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。

夏目漱石『こころ』219

d 康子は自分が江藤に恩恵を与えているような態度と、気位の高さとを以て、終生良人を軽視し続けるかも知れない。多分あの女と結婚したのちの、家庭の幸福に多くを期待することはできないだろう。

石川達三『青春の蹉跎』196

e 一つの本が出来るについて編輯者の努力のいかに大きく、それがいわば著者と編輯者との共同製作であるといった事情は、

多くの読者にはまだそれほど理解されていないのではないかと
思う。編輯者の仕事の文化的意義がもっと一般に認識され、そ
れにふさわしい尊敬の払われることが望ましいのである。

三木清『人生論ノート』269

他方で、少量性絶対数量詞の場合は、加賀(一九九七:七)では「いくつか」が挙げられていたが、「いくつか」は用例そのものも多くはなく、典型的なものとは言い難い。ここでは「少し」を取り上げてみたい。予想通り、「少し」あるいはハを添えた「少しは」が否定文中で用いられる用例を拾うことはできなかった。否定文中で見出されるのは「少しも」だけであり、その場合皆無を表わすことが確認できた。ただ(29)a~hのように数量詞として用いられる場合の他、

(29)(30) a~eのように程度副詞として用いられる場合もある。

(29) a 「おとなはずこしもそらあたりに居なかつた。なぜならペムベルとネリの兄妹の二人はたった二人だけずいぶん愉快にくらしてたから。……」 宮沢賢治『黄いろのトマト』105

b 「お前は病院が大きいからそう思ってるのだろうが、教えてやるが家には金なんぞ少しもない。みんなこけおどしだ。桃子、この地所だつて借物なんだぞ。親父が選挙で大損をするしな。本当をいえば、金なんぞ一文もないといつてよいくらいだ」

北杜夫『椋家の人々』328

c 青木夫人は、太郎には何という織物だかわからない着物を着ていた。それは、玄人風のところが少しもなくて、地味で感じ

よかった。

曾野綾子『太郎物語』 1296

d 真淵によつて主張され、子規によつて拍車をかけられた、万葉による実朝の自己発見という周知の仮説を否定し去る考えは少しもないが、この仮説の強さや真実さを支えているものは実朝自身ではない事をはつきり知つて置くのはよい事だ。

小林秀雄「実朝」 201

e が、どうかして私達がふいと目を見合わせるようなことがあると、彼女はまるで私達の最初の日々に見せたような、一寸氣まりの悪そうな微笑み方を私にして見せる。が、すぐ目を反らせて、空を見ながら、そんな状態に置かれていることに少しも不平を見せずに、落着いて寝ている。堀辰雄「風立ちぬ」 296

f 此頃僕に一点の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かつたに相違ない。しかし母がよく小言を云うにも拘らず、民子は猶朝の御飯だ昼の御飯だといつては僕を呼びにくる。伊藤左千夫「野菊の墓」 9

g 毎日のように、私は男の原稿を雑誌社に持つて行つた。少しも売れないのだ。何だかもう行きたくなくなつたのよと冗談に云つた事が、そんなに腹立たしいのだろうか……。

林芙美子「放浪記」 733

h その当時、野口は渡米十六年、老いた母にも会いたかつたし、故国に錦を飾りたかつた。しかし、名声は高くても、彼は金銭に恬淡な性格のため、少しも金の用意がなかつた。野口は星に

（カネオクレ、ハハニアイタシ）と電報を打ち、星はそれに応じて送金をしたのだつた。星新一「人民は弱し官吏は強し」 239

(30)

a そんな院長の言葉が自分の耳の中でがあがするような気がしながら、私はなんだか思考力を失つてしまつた者みたいに、いましがた見て来たあの暗い不思議な花のような影像をそれらの言葉とは少しも関係がないもののように、それだけを鮮かに意識の隅に上らせながら、診察室から帰つて来た。

堀辰雄「風立ちぬ」 201

b それらの日々に於ける唯一の出来事と云えば、彼女がときおり熱を出すこと位だつた。それは彼女の体をじりじり衰えさせて行くものにながいがいなかつた。が、私達はそういう日は、いつも少しも変らない日課の魅力をもつと細心にもつと緩慢に、あたかも禁断の果実の味をこっそり偷みでもするように味わおうと試みたので、私達のいくぶん死の味のする生の幸福はその時は一そう完全に保たれた程だつた。堀辰雄「風立ちぬ」 206

c 舟の着いたのは、木母寺辺であつたかと思う。生憎風がぼつたり歇んでいて、岸に生えている葦の葉が少しも動かない。向河岸の方を見ると、水蒸気に飽いた、灰色の空気が、橋場の人家の輪廓をぼかしていた。森岡外「百物語」 124

d 妻は一生懸命だつた。日頃少しも強く光らない眼が光り、彼の眼を真正面に見凝めた。彼にはその視線に辟易ぐ気持があつた。志賀直哉「山科の記憶」 397

e 彼は女を愛し始めてからも妻に対する気持を少しも変えなかつた。寧ろ欺いているという苛責かやくの念から、潤いある気持を続けて来たが、総てがこう露あわになると、それさえ白け、乾いて来るよう感じた。これだけの事で、直ぐそう、——一時的にしろ変る自分が腑ふ甲が斐いなく思われるのだ。志賀直哉「痴情」412

以上のように、第3・1節で検討した結論は妥当なものであると判断される。

おわりに

「はじめに」でも述べたように、否定文の研究の中でも、数量詞と否定との関係を論じることは常套的なアプローチであったが、従来の研究は論理学的見方に強く影響されて、必ずしも自然言語の数量詞と否定との間に働く規則性が正確にとらえられていない憾みがあった。そこで本稿では、可能な限り自然言語の中で数量詞と否定との間に働く規則性を浮かび上がらせようとしたわけであるが、どうやらその規則性は数量詞に留まらず、さまざま副詞類にも共通するものであるように思われる。続稿では、副詞類全般と否定との関係の定式化を試みたい。

○資料 阿川弘之『山本五十二・安部公房『砂の女』・石川達三『青春の蹉跌』・五木寛之『風に吹かれて』・伊藤左千夫『野菊の墓』・井

上靖『あすなる物語』・大岡昇平『野火』・北杜夫『榆家の人々』・倉橋由美子『聖少女』・小林秀雄『実朝』・沢木耕太郎『一瞬の夏』・椎名誠『新橋烏森口青春篇』・塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』・志賀直哉「痴情」・山科の記憶・島村藤村『破戒』・曾野綾子『太郎物語』・立原正秋『冬の旅』・竹山道雄『ピルマの豎琴』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・夏目漱石『ころろ』・新田次郎『孤高の人』・林芙美子『放浪記』・星新一『人民は弱し官吏は強し』・堀辰雄『美しい村』・風立ちぬ』・三木清『人生論ノート』・三島由紀夫『金閣寺』・宮沢賢治『黄いろのトマト』・宮本輝『錦繡』・森鷗外『百物語』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・山本周五郎『やぶ』・山本有三『路傍の石』・以上CD-ROM版『新潮文庫の一〇〇冊』(数字はCD-ROM版のページ)

参考文献

- Horn, Laurence R. (一九七二) "On the Semantic Properties of Logical Operators in English", Ph. D. dissertation, University of California, Los Angeles. (Reproduced by the Indiana University Linguistics Club in 1976)
- Horn, Lawrence R. (一九八九) "A Natural History of Negation", Chicago: The University of Chicago Press
- 井島 正博 (一九九一・三a) 「否定文の多層的分析」『成蹊国文』第二十四号 pp.1-73

- 井島 正博 (一九九一・三b) 「数量詞の多層的分析」『山梨大学教
育学部研究報告』第四十一号 pp.19-22
- 井島 正博 (一九九五・一〇) 「数量詞とハ・モ」『築島裕先生古稀
記念 国語学論集』汲古書院 pp.1041-1062
- 加賀 信広 (一九九七・七) 「数量詞と部分否定」『日英語比較選書
4 指示と照応と否定』研究社出版 pp.91-184